

## 第5回 スマートウェルネス三条推進会議（知的支援基盤）開催概要

■日 時：平成25年11月14日（木） 午後1時～午後3時

■会 場：三条市役所 2階大会議室

■出席者：久野委員（議長）、松原委員、小林委員、中村委員、村山委員

※羽藤委員、谷口委員、川中委員欠席

TWR・筑波大学

吉澤、金

オブザーバ

三条警察署（落合）、(株)アトリエ74建設都市計画研究所（佐々木）

三条市

國定市長、宗村市民部長、土田建設部長、渡辺福祉保健部長、政策推進課（阿部）、生涯学習課（野村）、環境課（小林）、営業戦略室（滝沢）、地域経営課（小出、吉田）、建設課（諸橋、藤澤、宮島）、高齢介護課（西澤、佐藤、佐藤）、健康づくり課（捧、栗林、麦倉、野口、大泉）、福祉課（駒形、近藤、松尾、池野）

報道機関 新潟日報、ケンオードットコム

### ■概要

#### (1)開会挨拶

國定市長

- ・推進会議5回目となり、今回から村山先生に委員就任いただいた。回を重ねるごとに委員が増え、フィールドが広い取組と再認識した。歩いて暮らせるまちづくり実現のため、様々なご支援をいただきたい。
- ・先日、三条警察署の協力の下、ゾーン30を設定し、三条小学校区に歩行空間を優先する取組も始まったところ。マルシェには一定の成果が出ているが、課題もある。特に高齢者に視線を移して、新たな取組も進めていきたい。

#### (2)新任委員挨拶

中村委員

- ・前回欠席し、今回初参加となる。平成20年に発足した組織で、新潟支部長を仰せつかっている。まだまだ努力不足の面もあるが、協力していきたい。

村山委員

- ・専門は、栄養・食生活を中心としたヘルス・プロモーション。これまでは海外での取組

を中心にしてきたが、国内にも着目している。三条市は食が豊かで、食育にも注力している。食と体を動かすことを一緒にやっていければ、と考えている。

### (3)議長挨拶

久野議長

- ・この会議の趣旨は、三条市のスマートウェルネスの取組の具体化を支援するもの。これまで筑波大から調査データを出しながら、課題を提示してきた。具体化が進む中、マルシェで一定の成果出ているが、高齢者の参加率は低く、むしろ定期市の利用度を上げ、外出機会を増やしていく方針と聞いている。
- ・スマートウェルネス首長研究会、25自治体から一気に36自治体に増えた。うち半数が関西の自治体で、8月下旬に國定市長にも講演いただいた大阪でのフォーラムの効果かと感じている。
- ・国でも環境未来都市のプロジェクトが立ち上げられ、先日の国際会議でも歩くまちづくりを主要なテーマの1つに議論があった。各国の取組を聞くに、東南アジアでもむしろ日本より進んでいる面がある。短期的、中長期の成果をそれぞれ見えるような形で進めていく必要がある。

### (4)スマートウェルネス三条の今年度重点的事業の実施状況について

- ・近藤室長から別紙により説明

小林委員

- ・ゾーン30については現在、新潟県内で36カ所計画があり、16カ所で実施済。県内で面積最大となるのが三条市の51ha。全国的には秋田、仙台で100ha超の導入実績もある。
- ・導入効果を測るには、まだ導入後1カ月しか経っていないが、エリア内での交通事故は7件発生しており、導入前1カ月の3件を上回るペースとなっている。10月は三条署管内全体でも事故発生件数が増加しており、効果としては今後の推移を見る必要がある。
- ・ただし、導入後の事故7件は、いずれも物損事故となっており、人身事故は発生していない状況。歩行者を巻き込む事故は発生していないが、自転車と自動車の衝突事故があり、自転車安全も今後、重要と考えている。
- ・また、ゾーン30の導入に連動した取組として、信号サイクルの見直しを行った。これまで朝夕の渋滞時は110秒間隔、閑散時は80秒サイクルとしていた信号機を「いもや」前交差点から本寺小路交差点までの5カ所について、終日80秒としている。これにより歩行者の方に、待ち時間少なく渡っていただける。
- ・カーナビへのゾーン30情報の掲載も実施している。
- ・ゾーン30の導入により、みんなが楽しく街を歩ける環境づくりに貢献できたかと思う。マルシェの取組同様、継続して繰り返し、楽しい雰囲気を作っていくことが重要と考え

ている。長く続けるには遊び心が必要で、義務感だけでは続かない。

- ・歩く人が増えることで防犯上も効果がある。外部から来た人にも、この街は少し違うな、と思わせられる。
- ・警察としても今後、優秀な若い職員を採用していきたい。白バイ、パトカー、ヘリ、音楽隊など、市民へのPRとして協力できる部分は進めていきたい。

久野議長

- ・SWCの関係で色々な自治体と関わっているが、警察との関係に苦勞している自治体は多い。

小林委員

- ・國定市長の考えは、よく理解できる。警察としても協力して環境をつくるために一緒に取り組みたい。

久野議長

- ・道路政策について欧州の事例など含め、松原委員から発言をお願いしたい。

松原委員

- ・ゾーン30は車を通すけど、歩行者に遠慮して、という象徴的なゾーン。道路には空間形成等、色々な機能があるが、車の通行機能が優先されがち。車を通さないゾーンも考えていく必要がある。全く通さないことは無理でも時間や用途を絞って制限する。
- ・道路には滞留空間の機能もある。通過する場所ではなく、その場にいる、という機能も重要だ。

小林委員

- ・車を入れない空間については、どこまで確保できるかを含め、色々と検討していきたい。

國定市長

- ・三条警察署さんとは奇跡のような関係を持たせていただいている。ゾーン30の導入についても、1年近くにわたって連携して検討させていただいた。滞留空間をつくるための歩行者優先、歩行者専用の道路空間創出については、警察さんとも一緒になって考えていきたい。
- ・今夏、ドイツ・エアランゲン市在住のジャーナリスト、高松平蔵氏に講演いただいたが、欧州でも20~30年前は市街地を車が走っていた。人の努力で徐々に規制し、今の形になった。欧州は元々、規制が強い社会という面もあるが、車を締め出しても商業機能は低下せず、むしろ向上しうることを欧州の都市は示している。滞留空間として、まずは広場の可能性を検討したい。

久野議長

- ・欧州でできていることが、日本でなぜできないのか。政治、法律、文化の違いもあるが、日本式のやり方を、先頭を切ってSWCの取組として進めていきたい。
- ・次に、さんじょう108appy（ひゃくはっぴー）について。街中の人を屋外に連れ出すことと同時に、郊外の人を街中に連れ込むことも賑わいの創出に必要でないか。その辺のバ

ランス感覚は、どう考えるか？

國定市長

- ・賑わいが昔はあったけれど今はなくなった、ということではない。昔は見えていたのだけれど見えなくなった、というのが仮説。
- ・休日にショッピングモールに行けば、大量の人であふれているが、モールの外にはその賑わいは見えない。同様に公民館に一定の人は集まっているが、それが建物の外には見えない。賑わいは私的な楽しみから始まるものなので、人の目につきにくい。無理やり賑わいを作っていくためには、それを単純に外でやってもらうだけでもよい。それを多くの人に見てもらふことで、何をやろうとしているのかを伝えていく。
- ・マルシェを毎日やればよいが、労力がかかる。1人、2人で出来ることを積み重ねていく。
- ・どういうバランスを目指すか、と問われれば、それすらも行政でコントロールできない形になるのが、理想的だ。

久野議長

- ・SWC各市でもウォーキング大会やマラソン大会など開催しているが、やはり大会は年1回開催して終わり。しかし、年1回だけ市民が何千人も参加したところで、健康になれる訳ではない。回数を増やすには、行政の負担を考えると、NPO等が運営を担う必要がある。この取組で行政が関わるイベントの組み立て自体が変わる可能性もある。

松原委員

- ・ドイツではNPO組織が多く、勝手に街に賑わいをつくっている。そういう団体を育てるのも行政の役割。
- ・また、賑わいをつくるために、街中に住む人を増やしていく。しかも特定の層だけでなく、年収、価値観、職業、家族構成のバラバラな人たちがコミュニティを作っていくことも静かな賑わいを作っていくのでないか。

久野議長

- ・居住人口については、後段でも取り上げたい。

國定市長

- ・市の取組として、委員の皆さんのお手元に配布した広報さんじょう。街中を歩くことをテーマにSWCをPRしたもの。こういう地道な市民への発信も行っているところ。

(5)「高齢者の食と暮らしの調査について」結果について

- ・大泉技師から別紙により説明

村山委員

- ・食のQOLという観点からは、食事が楽しいと感じている人が割合、多い印象がある。一方、高血圧、低栄養は改善の必要がある症状。この3点が健康寿命の延伸につながるのではないか。

- ・ QOLに関して、高齢者の経済的なゆとりは、半分くらいがある。ゆとりがなくても可能な社会参加を考えていく必要がある。また、少しでも収入になる仕事の創出も必要。
- ・ 共食の機会。社会参加の意味からも、食をあてがうのではなく、主体的に食べる機会をつくる取組が必要。定期市、マルシェ、オープンカフェ等の取組の中で、高齢者が一緒に作ったり、食べたりする取組ができないか。
- ・ また、どんな取組でも先に変わる人と、後から付いてくる人が出てくる。中々、外に出てこない人をどうするか。この調査で言えば、特に男性の独居者をどうするか。

久野議長

- ・ 今回の調査で、アウトカムを健康指標と結び付ける必要がある。メタボや高血圧、低栄養の割合と結び付けたり、独居者や経済状態の相関が取れるとよい。

村山委員

- ・ 低栄養の定義は難しいが、体重減少者は1割くらい、低BMIも1割くらい。しかし、体重が少ないと言っても脂肪が少ないのか筋量なのか等は、確かに問題ある。

久野議長

- ・ 主観的なアンケートと客観的なデータで、そのズレを見るのも方法。自分では健康だと思っても健康でないとなれば、健康知識が課題ということで栄養教育の充実等、対策も見えてくるのではないか。
- ・ また、サルコペニア、タンパク質の摂取は課題である。

中村委員

- ・ 将来に向けて今、どういう年代に力を向けていくのか。特に重要なのは、子供ではないか。三条市の学校給食は完全米飯で、しかも味噌汁等、和食の給食に注力していると聞いている。自然に動くようになるには、子供の頃の習慣づけが必要でないかと考える。

國定市長

- ・ 子供への働きかけについて、意識的な取組としては、まだ準備できていないが、整理してみると、和食中心の食育など、既に取組んでいる部分もある。自然な食習慣とする上では、まだ、これからの部分もある。

久野議長

- ・ 運動と栄養は、健康維持のための車の両輪。総合政策として考えれば農業にも及ぶもので、今後も村山委員にも参加いただき、栄養についても議論していきたい。

#### (6)健康都市実現を支える都市集約のあり方研究会について

久野議長

- ・ 国の特定地域再生制度を活用し、現在、見附市と三条市で研究会を開催している。  
※久野議長から、人口減少の動向、歩く距離の短縮等について、研究会資料をもとに紹介。

松原委員

- ・今後 30 年で人口が 25%減る。市街地が広がったままだと行政コストもかさむ。広い三条市の中で、どこに集約するか。市街地が広いと賑わいが作れない。バスや歩ける範囲内に収まるまちにしていく必要がある。
- ・三条小学校区は、かつての中心。そこに集約して、賑わいのベースを作ることが、歩いて暮らせる街の基本になるのでは。
- ・高齢者の食と暮らしの調査、興味深い。食は人の基本。一人で食べる孤食の問題。独居高齢者の生活の場をどうしていくか。どこまでが個人で考え、どこまでを行政で考えるのか。もう 1 つはコミュニティの存在。共生、互助の街を作っていく必要がある。

#### 小林委員

- ・三条市が日本一安全安心な街となってほしい。日本人の助け合う心を施策に盛り込んでどうか。人口が減っていく中で、貴重な宝である子供たちの安全を守る必要を強く感じている。市と協力して進めたい。

#### 中村委員

- ・協会の仕事に追われがちだが、今後も行政等、関係機関と連携し、意見交換をしながら事業に取り組みたい。

#### 村山委員

- ・実態把握をどうするか。アンケートと客観データの関連付けは重要。栄養指標も盛り込む必要がある。
- ・独居高齢者の増加は全国的な課題。個人ではなく、社会の問題として、どう捉えるか。特に共食は課題。
- ・所得と食事の問題。所得とタンパク質の摂取量の相関は全国的に見られる。高齢者の低栄養、筋力にも関係してくる。

#### 久野議長

- ・サルコペニア肥満の人は、男性で 1.7 倍、女性で 2.2 倍と高血圧リスクが高い。
- ・一部の地方都市では、既に地域経済の一部を年金所得者が回している、とも言われている。高齢者が減っていくことで地域経済が回らなくなる等、多方面のリスクも今後、考える必要がある。スマートウェルネスの観点から街づくりの中で、答えを出していきたい。

#### 國定市長

- ・長期的な街づくりの一方で、短期的な取組も必要。短期的な取組を、中長期的な課題解決につなげていきたい。
- ・三条小学校区では、現在の高齢者にどう幸せに暮らしていってもらえるか。高齢独居者が増えていく。外出機会を増やして、栄養面でも、と考えると、学校給食共同調理場跡地活用は、スマートウェルネスを次のステップに進める事業となるのではないかと。引き続きご支援をお願いしたい。

午後 3 時終了